

日本山岳写真協会 選抜展 「それぞれの山」

日 時／平成18年12月12日(火)～19日(火)

会 場／コニカミノルタプラザ ギャラリーC

1	黒部渓谷 下の廊下を行く	梅本知栄子
<p>雨上がりの黒部渓谷は、素晴らしいシンフォニエッタ(小規模のシンフォニー)。 黒部別山や周囲の山々を粉雪がおおい、赤や黄色の秋色がアクセントを添える。コバルトブルーの空、流れる白い雲、オーケストラが最高の音楽を奏でているような半日。しかし、目的地、十字峽に着いた時、再び雨空になり、オーケストラは雨音のみを演奏していた。</p>		
2	紅の輝き	大石高志
<p>太陽は万物の創造の源として古くから崇められてきた。 また、神々が宿る神秘的なものとして、現在でも信仰の対象となっている。山岳における太陽は、それが作り出す陰影とともに山の姿を刻々と変化させている。 太陽の光と雲が繰り広げる一瞬の鮮やかな紅の輝きを楽しんでいただきたい。</p>		
3	鹿島槍ヶ岳北壁 — 秋から冬へ —	小澤正美
<p>双耳峰の優美な山姿の北側には、想像し得ない峻険な大絶壁・北壁がある。谷深く切れ落ちた岩壁は、槍の穂の如く、「鹿島槍」の名の所以といわれている。その雄姿を遠見尾根からレンズを向け対峙するとき、手の届かんばかりに眼前に迫る北壁は圧巻。 晴れば喜び、ガスに閉ざされれば憂い、移ろいに一喜一憂する。季節の移ろいの中で一期一会。このとき、また心に映える山が一つ増えるのである。</p>		
4	涸沢秋色	小田薫
<p>前穂高岳、奥穂高岳、涸沢岳、北穂高岳と、3000m峰に囲まれた涸沢氷河圏谷の秋は豪華絢爛、筆舌に尽くし難い紅葉に包まれる。 ナナカマドの赤、ダケカンバの黄、ハイマツの緑と岩峰が織りなす風景は、多くの岳人たちに撮られてきた。類似の写真にならないよう、新しいポイントを探して涸沢の秋色を表現した。</p>		
5	下の廊下 秋景	川野誠
<p>北アルプスの中心を北流し、富山湾に至る黒部峽谷は深く険しく、廊下と呼ばれる峽底を辿ることは容易ではない。とりわけ、下の廊下を辿っての写真撮影は困難と危険を伴う。 しかし、秋期には比較的安心して撮影が可能であり、その上、絶壁の峽底から山上への錦秋の彩りには目を奪われる驚異の景観である。</p>		
6	太陽と私	鈴木進
<p>北アルプスに魅せられて何度となく訪れて思うのは、いつも太陽のご機嫌を伺っている。 山々を眠りから目覚めさせ、暁の色に染め上げていく。今日はどんな顔を見せてくれるのか…… 胸をときめかせて待つ。 陽と陰の絶妙な味。そしてまた、闇の世界へと誘う。 春夏秋冬 時を刻み、時空を超えて装いを変えていく。太陽よ、我が恋人たれ。</p>		
7	南八ヶ岳 厳冬	長澤靖
<p>南八ヶ岳は、赤岳を中心とする岩稜帯。北アルプスと比較して、雪の量は少ないものの、強い北西風は乾燥しており、実際の気温よりも体感温度は低く感じる。 そのような気候は、降雪後、岩稜や樹木をモノトーンの世界へ導く。</p>		
8	表富士 冬の便り	名取洋
<p>富士山、標高 3,776m。コニーデ型の美しい山である。森林限界は 2,500m 付近。 高い標高ゆえ、山頂は冠雪しても五合目付近では強風によって変形したカラマツなどが、黄葉の盛りを迎える。本格的な冬を前にして一瞬の美しさを見せる。</p>		
9	秋日和 奥丸山へ	前田春好
<p>「天高く 鈴の音渡る 滝谷へ」 「老木に もうすこしだよと 励まされ」 へたな詩を読みながら、ようやく辿り着いた。風もなく眺めは最高だ。槍・穂高が染まり始めた。 この場所を教えてくれたAさんに感謝し、シャッターを切った。</p>		
10	劔岳初冠雪	松原貴代司
<p>入山日の2日間を含め豪雨が続き、3日目の後半から降雪に変わった。 神の恵みか、下山日の夜半から晴れ渡り、初冠雪の裏劔が紅葉と秋雲に彩られ輝いた。</p>		
11	台高山脈の木、樹	三木俊郎
<p>真冬の凍てつく風に耐え、青空の下、美しい氷の衣を身にまといポーズをとる、木。 数百年の間を生き抜き、多くの登山者を見守る、木。 強風を負ってしまったのか、息絶えて大地に還る、樹。 都会の喧騒の中にいると、彼らの声は聞こえてこない。しかし、彼らは静かにそして淡々と、そこで生と死を繰り返している。 山に入ると、時折誰かの声が、聞こえる気がする。今日も山では、木樹たちのドラマが繰り広げられている。</p>		
12	稜線漫歩 双六岳	前羽光雄
<p>北アルプス奥飛騨の自然、双六岳。対峙する槍・穂高岳連峰が、鋭く天を突かんばかりの岩峰なのとは対照的に、なだらかな山容を誇る。 高山の夏は短く、駆け足で通り過ぎていく。夏真っ盛りの記憶。</p>		